

## ⑤差別をなくす

### 「今度は私の出番」

昨年の8月、叔父の初盆おじ はつぼんでした。父の弟で、曲がったことが大嫌いな、頼りになる叔父でした。叔父との思い出の中で、印象に残っていることがあります。それは、私が高2の頃、姉の結婚相手が被差別部落出身であるとわかった時のことです。姉にお付き合いをしている人がいることは、両親よりも早く知っていました。その人と姉と一緒に食事に行ったり、遊んでもらったり、「この人がお義兄ちゃんになってくれたらいいなあ」とずっと思っていました。



8月初旬の暑い日、その人が姉と一緒に両親に会いに来て、自分が被差別部

落出身であることを打ち明けたのです。重苦しい空気が漂っていたのをはっきりと覚えています。両親は何も言わず、私はそんな両親に対して苛立たしさを感じていました。「生まれたところで差別をするのはおかしい」と思っていたからです。でも、両親は意思表示をすることはなく、二人は帰りました。

お盆に叔父が帰省した時、両親は叔父に姉の結婚について相談をしました。叔父は腕組みをしたまま「兄ちゃんは間違っどる。二人は心臓がはりさけんばかりの思いで挨拶にきた。それに応えないなんて。子どもを応援するのが親じゃろうが」と言ったのです。父親は、声を荒げ、「そんなことはわかっどる。でも、妹が差別を受けるかもしれん。結婚にも影響

があるかもしれんじやろ」と私を見たのです。

叔父は、私に「なあ、お父ちゃんは、あんなふうと言っどるが、お前は、どう思う」とたずねてきたのです。突然のことで驚きましたが、「もし将来、私のお付き合いしている人が、お姉ちゃんのパートナーのことを理由に結婚できないなんて言うなら、そんな人こっちからお断りよ」と言ったのです。



叔父は、「よく言った」と私の肩をポンとたたきました。

そして、父に向かって、「差別をされている人が肩身の狭い思いをして、差別をする人が大手を振って歩く社会は間違いじゃ。小さいころ、いつもいじめっ子から俺を守ってくれたやないか。同じように今度は二人を守ろうや」と言ったのです。父は、深呼吸しながら、「そうやなあ、お前の言う通りじゃ」と答えたのです。それから、しばらくたった9月に両親は姉の結婚相手に会いにいったのです。

あれから数十年が経ちました。私も部落差別については、お義兄さんから体験をもとにした話を聴きながら、ずいぶん勉強してきたつもりです。私の子どももあと数年もたてば、結婚を考えてもおかしくないような年齢になります。「今度は私の番だね」叔父の写真をみながら、そう叔父に話し掛けたのです。

1965年に同和对策審議会答申たいさくしん ぎかいとうしんが出されて57年が過ぎました。答申には、「結婚差別が一番乗り越えがたい壁かべ」であると書かれてあります。しかし、大人が部落差別についての学びを土台として、差別のおかしさに気付き、差別は許さないと行動することにより、一番「止めることのできる差別」とも言えるのではないのでしょうか。

確かな認識を持ち、行動すること・・・「人を差別する人間」になるのか、「差別をなくそうとする人間」になるのかを問われているのです。

### 豊かな心を育む人権・同和教育